研究論文

日韓の假山趣味

外 村 中*

The Kasan, Artificial Mountains in Korea and Japan

Ataru SOTOMURA

摘要：大仙院の庭園を代表とするいわゆる枯山水は、はたして、本当に、日本独自の庭園様式なのであろうか。本稿は、日本において枯山水が成立したと考えられる時代に、日本とほぼ同様の庭園趣味が、韓国にもあったらしいことを紹介し、枯山水の新たな解釈の方向性を示すものである。

はじめに

本稿にいう枯山水とは、大仙院の庭園を代表とするような一庭園空間としてのいわゆる枯山水のことである。¹⁾

さて、この枯山水という言葉は、今日、日本庭園史の分野においては、極めて一般的な用語であるのだが、江戸時代以前の文献においては、ほとんどまったく現われない極めて特殊な用語であることは、周知の通りである。²⁾ では、今日、我々が一般に称している枯山水は、当時、どのように称されていたかといえ、例えば、大仙院の庭園は、その記録にあたると、かつて、假山と称されていたことがわかる。この假山という言葉は、そもそも中国語であるのだが、後には、日本においても、韓国においても使用されている。

ということは、枯山水の代表と誰しもが認める大仙院の庭園をはじめとする日本の假山の記録の内容を分析し、韓国や中国の假山の記録の内容と比較すれば、枯山水の成立の背景を探ることができるのではなかろうかと考えた。枯山水は、はたして、まったく日本独自の造形思想をもとに成立したものであろうか。実際、日本の枯山水と韓国や中国の庭園との詳しい比較研究は、今日まで、ほとんど為されていないのが現状のようである。³⁾⁴⁾

そこで、まず、本稿では、特に、大仙院の假山がつくられた時期（十六世紀）以前における日本と韓国の假山趣味の内容の比較を通して、枯山水成立の背景を検討して見たい。

尚、資料は、庭園史的立場から、かなり大幅で大胆な口語意識を試みた。不適切なところもあるかと恐れているところである。

1. 日本における假山趣味

本章は、次のように構成する。

まず、第Ⅰ節で、いわゆる枯山水の代表である大仙院の庭園に関する文献資料にあたり、大仙院の枯山水が、かつては、假山と称されていたことを再確認する。つまり、枯山水とは、假山の一形態であることから、議論をはじめたいのである。もちろん、すべての假山が枯山水であるわけではない。そして、第Ⅱ節と第Ⅲ節では、枯山水は、主に、禅院に残されているという点から、禅僧によって記された假山や假山水に関する詩の代表例にあたり、枯山水の成立の背景になったのではなかろうかと考えられる假山趣味の内容を概観したい。⁵⁾ また、併せて、枯山水に関する従来の解釈に関して、若干の疑問点を指摘する。そして、最後に、第Ⅳ節で、日本における假山趣味の内容を整理する。

Ⅰ) 大仙院の假山

京都府京都市北区紫野大徳寺町に位置する大仙院は、正法大聖国師古岳宗亘(1465-1548)により、永正六年(1506)に創建されたものである。永正十年(1513)に方丈建築が出来上がっているので、庭園も、その頃、古岳宗亘によって作られたものであろうと考えられている。⁶⁾ 驢雪鷹瀨(16C.)の『故大徳正法国師古岳大和尚道行記』(1551)に、古岳宗亘は、「禅の修行の合間に、珍しい木を植え、怪石を移して庭園をつくった。彼が、庭園を作ることは、まるで、靈山和尚すなわち徹翁義亨(1295-1369)と同じようだった。これは、いわゆる、昔の聖人と後の世の聖人が同じことをするといったものである。(禅余裁珍樹。移怪石。以作山水趣者。猶如靈山和尚。所謂先聖後聖一揆耳。)」⁷⁾ とある。これに

*京都大学農学部造園学研究室

より、古岳宗亘が、大仙院の庭園をつくったと一般に考えられている。尚、ここに、「怪石を移した」と記されており、作庭における怪石趣味が確認される。怪石趣味には、怪石を単体で鑑賞するという方法もある。しかしながら、この文の文意から考えて、すなわち、ここでは、作庭に関して述べられているので、ここにいう怪石趣味は、怪石を用いて築山を作ったことと解釈してよからう。また、「昔の聖人と後の世の聖人が同じことをする」とあるので、このような怪石趣味が、古岳宗亘の個人的な趣味に止まらず、当時流行していたものとも解釈されよう。

また、高桐院所蔵の『烏焉集』には、天和三年(1683)の記録として、「大仙院は、紫野の大徳寺の方丈の北にある。すなわち、これは、大聖国師の塔頭である。塔頭の傍らに、假山がある。その様は、極めて素晴らしい。(大仙院在紫野方丈北。乃大聖国師塔所也。塔側有假山。其制極妙。)」⁸⁾とある。ここに、假山と明記されており、大仙院の庭園、すなわち、大仙院の枯山水が、かつて、假山と称されていたことを確認することができるわけである。

Ⅱ) 禅僧の假山趣味

いわゆる枯山水が、禅院を中心に残されていることは、周知の通りである。これは、禅僧の間において、作庭が流行していた結果であるといえよう。そしてこの点を裏付ける資料が、たとえば、前述した『(故大徳正法国師)古岳和尚道行記』に見える「古岳宗亘が、徹翁義亨と同様な庭園趣味をもっていた。」という記録であり、また、近年見出だされた京都の教王護国寺(東寺)に伝わる『雑々見聞集』に見える杲宝(1305-1362)の「禅の修行を行なう者は、作庭をすべきではない。(修禅人不可作前栽等事。)」⁹⁾という主張であると考えられよう。

①大仙院の枯山水は、かつて、假山と称されている。

②枯山水は、禅院を中心に残されている。

この二点を考えるに、禅僧によって記された假山に関する詩は、枯山水の成立の背景を考えるに、極めて重要な意味を持っているといえよう。よって、以下に、その代表例を見てみたい。尚、以下の詩に見られる假山という言葉は、単に築山を意味する場合もあれば、いわゆる庭園空間を表す場合もあり、また、そのどちらか必ずしも明確ではない場合もある。

景徐周麟(1440-1518)の『翰林葫蘆集』には、「假山小雨」と題する次のような詩が二首ある。¹⁰⁾

「この古寺の庭には、土をもって築山がつくってある。屋間の雨に霞んで、暗い欄の前の庭園を鑑賞する。二人の老僧を、おぬし達は暇かと、笑って迎えた。そびえた大きな築山の半分が雨の中に青々として実に美しい。」

疊土為山古寺庭。欄前欲雨晝冥々。笑迎二老假非假。分破龍峰一半青。

「庭の下に假山がそびえている。その一つの峯は、雨に煙り、また、その一つは、雲に隠れている。假山の峯は、峻しくて、欄の高さよりももっと高い。いつでも、君に、この假山を見てほしいものである。」

庭下假山高出群。一峯既雨一峯雲。孱顔迎咲欄干上。莫道黃塵不見君。

以上において注目すべき点は、

①土で假山をつくっていること。

②欄の前、庭の下に假山があること、すなわち、建物の中より鑑賞する假山であると考えられることである。尚、ここにいう假山は、築山であると考えてよからう。また、ここに「庭の下(庭下)」とあるが、この「庭」という言葉の意味は、建物の前面の空間を意味し、必ずしも、いわゆる庭園空間を意味するものではないことは、周知の通りである。以下の資料に見られる「庭の下」という表現に関しても、当然、同じである。

義堂周信(1326-1389)の『空華集』には、

「…途中、法福寺に立ち寄った。その寺の主人である松巖は、私をよい部屋に泊めてくれ、たいへん親切にしてくれた。その時は、大殿の修理が完成した時であり、すぐれて美しかった。庭の下の假山や盆の中の様々な木々は、皆、実に見事であった。…」

と序のある次のような詩がある。¹¹⁾

「五年に三度、成田寺にやって来た。寺は、より立派に改修されていた。本殿の色彩は美しく、朝日に輝いていた。假山の花や木は、春風になびいていた。林は、すぐそこまで迫り、すずしい日陰をつくっていた。岩場には草木が茂っていた。もっとも有り難かったのは、主人のもてなしであった。夜は、実にすばらしい琴の音に耳を傾けることができた。」

…路過法福精舍。主翁松巖法兄館余正寝温顧甚厚。是時百廢俱舉大殿修成最麗。而庭下假山盆中諸木異狀皆可愛也。…

五年三到成田寺。百廢一新踰舊功。寶殿丹青輝曉日。假山花木長春風。翠分林際蔭涼樹。盤剝楊岐栗棘蓬。最感主人留宿客。夜泉洗耳聽焦桐。

以上において注目すべき点は、ここにおいても、庭の下に假山があること、すなわち、建物の中より鑑賞する假山であると考えられることである。

夢巖祖応(d.1374)の『旱霖集』には、「修假山」と題する次のような詩がある。¹²⁾

「市街地や山野を移り住んだ。今、我が身の落ち着くところは、この家である。木々もようやく茂り、鳥が憩うほどになった。池は、水が澄みすぎて、魚はすめない。」

雑草や、平凡な花は、ここにはない。怪しい形をした松や珍しい石が庭園の景となっている。私は、すでに、歳をとり、今は、暇を楽しんでいる。悩みなどありはしない。此处での生活を、ここに記しておきたい。」

城市山林不定居。一身安處是吾廬。樹因漸密可棲鳥。池為太清難種魚。俗草凡葩人所棄。怪松奇石友相於。老耽閑事知何意。也勝緇衣裹蠟書。

以上において注目すべき点は、

①珍しい石（奇石）を庭園に配置したことが明記されていること。

②ここにいう假山という言葉は、池のある庭園空間を意味していることである。したがって、假山という言葉は、必ずしも、枯山水を意味するわけではない。

別源円旨（1294-1364）の『東帰集』には、

「庵住まいに、たいした工夫はないが、ただ、窓の前の空き地に、石をあつめ、土をもって、岩が重なりあった山や崖、その他、島や中洲といった山水の景を象った庭園をこしらえた。夏の長い一日、これを眺め、竹の杖をつき、草鞋をはき、中国の呉の山、楚の川をぶらぶらと遊び暮らした昔のことを思い出した。すると、ふさいだ気持ち、晴れ晴れした。この度、思いもよらず、兄弟子である中岩和尚から新しい詩が届いた。すぐに、私の庭園にある取るに足りない石や木に目をやった。どれも、実に美しく見え出した。私のこの庭園（擬山）は、兄弟子の詩によって、きっと後世に名を残すにちがいあるまい。あまりのうれしさに何もいえない。それで、兄弟子の詩を手本に、ここに、簡単ではあるが、謝意を述べる。」

と序のある次のような詩がある。¹³⁾

「静かに、庭（庭除）に向かって、いろいろと考える。小さな松の木や石ころまでが、実に美しい。心が飛び遊ぶ時には、風に乗って飛行するという仙人の術なんて必要はない。心は、どこへでも飛んで行けるので、数千里にも及ぶ遠いところを目の前に集めてしまうという仙人の縮地の術なんて、どうして必要があらう。新たな詩のために、うまい文句を考える。美しい花や小さな草々が静かな匂いを漂わすような文句を。俗界は、今は、六月、暑さが厳しい。どうやって、この山中で、一時の涼を楽しもうか。」

庵居無故。適於窓前隙地。聚石積土。擬疊巖層崖遠嶼孤洲之状。長日對此追思。竹杖茆鞋。浪遊吳山楚水之舊事。追遣閑懷也乎。偶承法兄中岩新詩題品。即見頑石凡木。悉為奇觀。我此擬山。得兄詩知名於後時必也。幸何言哉。因歩來韻。略見致謝云。

靜向庭除著意長。尺松拳石亦非常。神遊不假馭風術。心到何求縮地方。佳句新題經品藻。閑花小草吐幽芳。人間六月多炎熱。爭得山中半日涼。

以上において注目すべき点は、

①擬山という言葉が用いられていること。これは、文意より、假山と同義であると考えられよう。また、それは、庭園空間を意味しているようである。

②土で擬山（假山）をつくっていること。

③塀に囲まれた小庭園を眺める（向庭除）とあり、小さな庭園空間に擬山（假山）が作られていること。

④窓の前に擬山（假山）が作られているので、建物中より観賞する假山であると考えられること。

⑤石（拳石）が配置されていること。

⑥“縮地の術（縮地方）”が言及されていることである。

ところで、“縮地の術”とは、本来、数千里にも及ぶものを縮めて、目の前に集めるといった仙術のことで、これは、『後漢書』や『神仙伝』等に記されている中国起源の神仙に関わる伝説に基づくものである。¹⁴⁾ その伝説によれば、ある時、費長房という名の町役人が、壺公という人物にしたがって、壺の中に飛び込んでみると、そこは、仙境（壺中の天地）であったという。また、費長房は、壺公より、大地を目の前に縮めてしまう秘術（縮地の術）を学んで用いたといわれる。

一方、作庭における“縮地の術”とは、一言で云うならば、以上のような伝説にちなみ、何かを象徴した小規模な庭園をつくることである。この別源円旨の詩に於いては、心が遊ぶ時、すなわち、想像を楽しむ時には、“縮地の術”は、必要ないと否定されている。しかしながら、実際には、日本の假山趣味においては、“縮地の術”とみなせる造形思想が、極めて流行していたようである。例えば、“縮地の術”を否定している別源円旨は、同じ詩の中で、窓の前の空き地に、自然の山水を象る庭園を作ったと述べている。これは、まさしく、“縮地の術”とみなせるものである。また、後述する虎関師練の『済北集』の「假山」と題する詩に見られる「小さな人工の滝に、巨大な滝の勢いを持たせる」といった例や、同じく、『済北集』の「假山水」と題する詩に見られる「蓬來や方壺といった神山（を象る築山）が、庭の下にある（蓬島方壺庭下域。）」といった例等も、“縮地の術”であるとみなせよう。さらには、枯山水の特質を論ずる時、よく引用される資料として、般若房宗熙（鉄船）（15C.）の「假山水譜并序」に見える「三万里程を尺寸に縮める。（縮三万里程於尺寸。）」という句がある（第Ⅲ節参照）。¹⁵⁾ これも、正しく“縮地の術”とみなせるものである。

ところで、ここで、誤ってはならないことは、このような造形思想が、中国起源の神仙に関わる伝説に基づく造形思想であって、禅宗によって独自に生み出された造形思想ではないという点である。このような造形思想を、極めて禅的なものとする解釈が多く見られるが、むしろ、

「禪を行なう者たちによって広く受け入れられた造形思想である」とするほうが、正確な解釈であろう。¹⁶⁾

尚、このような造形思想が、実は、ほぼ同じ時期の韓国においても、広く流行していたらしいことを、次章で紹介する。また、中国においても、このような造形思想が、唐代(618-907)、特に、中唐(766-835)以降、庭園の基本的造形思想になっていたようである。¹⁷⁾

虎関師練(1278-1346)の『済北集』には、「府亭假山」と題する次のような詩がある。¹⁸⁾

「珍しい草花が美しい。土をもって築山をつくる。この世も、これより、不老不死の世界となる。今、目の前に、蓬萊と瀛州の二つの神山(を象る築山)がある。」

奇花異草各呈靈。一簣施功九仞成。世上從今無老死。目前現在是蓬瀛。

また、「假山」と題する次のような詩もある。¹⁹⁾

「庭の中央に、土をもってつくった築山が聳えている。松や竹が美しい。小さな人工の滝に、巨大な滝の勢いがある。それは、ただ、珍しい石を、たくさん積んだだけのものなのに。」

簣土施功聳半庭。移松種竹結寒盟。一尋瀑布勢千尺。只自磊砢奇石成。

以上において注目すべき点は、

- ①土で築山をつくっていること。
- ②築山が、蓬萊や瀛州といった神仙思想に関わる神山を象るものであること。
- ③珍しい石(奇石)を用いた滝石組があること。
- ④小さな人工の滝石組に、巨大な滝の勢いを持たせるといった“縮地の術”がとられていることである。

天岸慧広(1273-1335)の『東帰集』には、「假山聚景」と題する次のような詩がある。²⁰⁾

「ここには、世俗を超越したやすらかさがある。景色は、美しく、まるで、神山、瀛州であるかのような気になる。めずらしい花や見事な石に、心の奥が開かれるような気になる。大自然を想像させてくれる残山剩水の趣きを見ることにより、仏理を明らかにする目が養われる。広大なこの汚れた世の中に、物事の根本原理を明らかにさせてくれる。とりとめのないこの世のことは、気にならない。香のかおりが漂う中で、茶を一杯する。閑かに、『茶経』という本でも読み、客に向かって、批評でもしてみる。」

特地乾坤方外樂。平分風月幻僊瀛。異花靈石神閑閑。剩水殘山眼倍明。浩浩塵中能辯主。悠悠世事不關情。一爐沈水一甌茗。閑讀茶經對客評。

以上において注目すべき点は、

- ①築山が、神仙思想に関わる瀛州という神山を象るものであるということ。

②見事な石(靈石)を用いていること。

③風景の断片的な部分を組合せることにより大自然全体を想像させるような絵画的構成、すなわち、残山剩水の趣が記されていることである。

ところで、以上にいう“残山剩水”とは、本来、最小限のモチーフにより、明解な絵画空間を構成しようとした中国、南宋(1127-1279)の馬遠(?)一派によって完成された山水画における構図法である。ちなみに、この構図法をはじめとし、中国山水画の技法および理論を作庭に応用したのが枯山水であるとする説明が多く見かけられるのは周知の通りである。²¹⁾ 枯山水は、中国山水画の影響をまったく受けなかったとは、当然いえない。ただ、中国山水画の技法および理論の影響を強調するのであれば、枯山水が、現在の中国に見られる庭園と、なぜ、かくも形態を異にするのか説明しておく必要がある。なぜなら、中国においても、山水画の技法および理論を作庭に応用することが盛んに主張され、また、現実に行なわれているからである。²²⁾ 例えば、中国の代表的造園書『園治』(1634)の著者である計成(1582-?)は、山水画を手本に作庭を行なっている。また、彼のつくった庭園は、唐(618-907)末から北宋(960-1127)初期にかけての山水画の大家である荆浩(?)や関仝(?)の作品に通じるものであったということが、『園治』の序文より知られる。²³⁾

Ⅲ) 假山水

庭園を意味する假山という言葉の同義語として、假山水という言葉がある。これは、どうやら日本の言葉らしく、韓国や中国において、未だ、その用例は確認されていない。ここでは、假山水を記した代表的な文献資料にあたるが、特に、枯山水の特質である水を用いないということを明確に示す唯一の例として、夢窓疎石(1276-1351)の「假山水韻」と題する詩は、極めて注目に値しよう。

般若房宗熙(鉄船)(15C.)は、文明九年(1477)に「假山水譜并序」を記しているが、そこには、次のような内容が見られる。²⁴⁾

「たいてい、金持ちが、假山水(庭園)を作るときには、いつも、人を雇い、お金や穀物を与えて、石を引かせ、土を運ばせる。払うお金が多ければ、その分、石も大きく、与える穀物が多ければ、その分、土も多い。それでいて、幾月たっても、完成しない。こんなことは、貧乏人には、できることではない。私には、山水(作庭)の趣味があるものの、お金や穀物の蓄えはない。したがって、自ら、石を引き、自ら、土を運んだ。それでも、苦しいとは思わなかったし、飽きることもなかった。そうして、ここに、石や土をつんで、それなりの山水(庭園)

をつくったのである。幾日も経たぬうちに出来上がった。完成してみれば、蟻の塚ほどの小さな築山が、まるで、五岳の如く聳えて見える。蛙の穴ほどの小さな池が、まるで、大海のように見えるのである。まさに、僅かの努力で、大きな結果が得られたわけである。…私の庭園は、大きくないが、三万里に及ぶ広大な風景を、僅か尺寸の大きさに縮めたように見えるのである。…」

凡富家之於假山水也。必借力擔夫。償勞於傭者。而與金分穀擔石搬土。金重則石重。穀多則土多。累月而未成。之寔非貧家所能為焉。余雖有山水之愛。而無金穀畜。繇繁自拽石而忘勞。自搬土而無倦。爰石土之所積。而某山也。某水也。得不日而成。及乎其成。則聳五嶽於蟻封。望重溟於蛙坎。是豈非所用之力小而所獲之功大者哉。…對境而無遠近之方。縮三萬里程於尺寸。…

以上において注目すべき点は、

①假山水という言葉が、いわゆる庭園空間を意味していると解釈されること。

②広大な風景を、尺寸に縮めるとあるので、作庭における“縮地の術”が確認されることである。

ところで、以上は、枯山水の特質を論ずるとき、よく引用される資料であることは、周知のとおりである（第Ⅱ節、別源円旨の詩を参照）。尚、この資料に見られる假山水という言葉は、枯山水そのものと解釈する研究者があるようである。²⁵⁾ しかしながら、それは誤りで、ここに云う枯山水は、池を含む庭園空間を意味している。

龍泉令淬（d.1365）の『松山集』には、「和安国老假山水韻」と題する次のような詩がある。²⁶⁾

「静かな庭園をつくった。虚しく時を過ごすうちに、草木が茂ってしまった。ぼちぼち、刈り取らねばならぬだろう。ここでは、夜は、裏にある泉のせせらぎを聞き、夕には、陽を照りかえす美しい山々を眺める。」

造境即中能養閑。説空説假髮無間。鑊頭不識在誰手。夜後泉聲夕照山。

以上において注目すべき点は、假山水という言葉が、ここにおいても、いわゆる庭園空間を意味すると理解される点である。

虎関師練（1278-1346）の『濟北集』には、「假山水」と題する次のような詩がある。²⁷⁾

「ここは、修行を積んだ人の家である。その半分程は、庭園になっている。流れがあり、曲がりくねり、池に注ぎ込んでいるのが美しい。三つの石を組合せて作った築山が、山という字を表わすかのように、高く峰のように聳えている。²⁸⁾ 蓬來や方壺といった神山を象る築山が、庭の下にある。欄の前には、神仙の伝えにいう羅浮山や、仏教の教えにいう檀特山を象る土でつくった築山がある。このすぐれた庭園を、奇異と思う勿れ。雲が湧き起こっ

て、目の前の庭園を隠してしまう。」

自是土人環堵宮。還分半堵象靈蹤。一流盤屈水文沼。三石參差山字峰。蓬島方壺庭下域。羅浮檀特檻前封。嘉區莫怪尋常地。雲夢由来蒂芥胸。

以上において注目すべき点は、

①假山水という言葉が、明らかに、いわゆる庭園空間を意味していること。特に、ここでは、流れや池のある庭園を描写している。

②庭の下や、欄の前に築山があること。すなわち、建物の中より鑑賞する庭園であると考えられること。

③その築山が、神仙思想に関わる蓬來、方壺、羅浮山といった神山や、仏教の教えにいう檀特山を象ったものであること。したがって、

④作庭における“縮地の術”が用いられているとみなせること。

⑤築山が、土でつくられているらしいことである。（封は、“土を盛る”という意味。）

尚、蓬來が、蓬島と記されているので、蓬來や方壺は、苑池中の島であるとも考えられよう。

ところで、一条兼良（1402-1481）は、『尺素往来』において、「假山水は、海様、河様、池様、泉様、遣水様、岩井様、細谷川様、枯山水様、山形、野形、洲浜形、葦手形等」と述べている。²⁹⁾ これが、庭園空間の分類であることは、本節であげた資料の假山水という言葉の用例によっても、明らかであろう。ついでだが、『尺素往来』にいう枯山水様という言葉が、いわゆる庭園空間としての枯山水を示す最も古い用例であることは、周知の通りである。

夢窓疎石（1276-1351）の『夢窓正覚心宗普濟國師語録』には、「假山水韻」と題する次のような詩がある。³⁰⁾

「小さな築山に、峻険な山岳を想像する。水の流れない谷に、滝が落ちる様を想像する。月の美しい今夜、再び、ここへやって来た。このすばらしさがわかるのは、私だけであらうか。」

纖塵不立峰巒峙。涓滴無存澗瀑流。一再風前明月夜。箇中人作箇中遊。

以上において極めて注目に値する点は、

①峻険な山岳を想像させる築山があると記されているので、作庭における“縮地の術”が用いられているとみなせること。

②滝の落ちる様を想像させる水の流れない谷があることである。

特に、第二点目は、まさしく枯山水の特質である水を用いず水の流れを想像させる庭園の美しさを示しており、見逃せない。

ところで、現在のところ、日本における禅僧の假山趣

味を示す文献資料において、これほど、枯山水の特質を示す資料は見出だせないようである。また、これは、日本における禅僧の假山趣味を示す資料の中で、最も古いものに属する。したがって、これにより、枯山水は、夢窓疎石が見出だした庭園美に他ならないと結論する研究者もあるようである。³¹⁾

しかしながら、筆者は、必ずしも、そのように言い切れるとは限らないのではなからうかと考えている。というのは、明確な文献資料が見出だせないという理由だけでは、水を用いず水の流れを想像させる庭園が日本にしか存在しなかったと断言することはできないのではなからうかと考えるからである。実際、筆者の知るかぎり、水を用いず水の流れを想像させる庭園を明確に記した文献は、日本の禅僧の假山趣味を記した文献においても、夢窓疎石の以上の資料だけのようである。それほど、極めて希なものである。また、枯山水と同様な庭園が、今日の韓国や中国に見出だせないのは事実のようだが、また、それだけで、かつては、日本と同様な庭園が、韓国や中国にもあったかもしれないという可能性をまったく否定してしまうこともできないのではなからうかと考える。なぜなら、現存する韓国や中国の古庭園が、時代的にどこまで遡り得るかに関しては、必ずしも明らかになっていないからである。したがって、現段階では、日本の枯山水と現存する韓国や中国の古庭園を直接比較するのは、必ずしも適切ではないようである。

とにかく、日本、韓国ならびに中国の庭園に関する掘り下げた比較研究は、今日まで、ほとんどなされていないのが現状のようである。日本の庭園を考える場合、韓国ならびに中国の庭園との比較なしには、日本の庭園がもつ独自性を、正確に理解することはできないだろう。

たとえば、中国の庭園技術の大系書であるともいえるの計成(1582-?)の『園治』(1634)には、次のような内容が見られる。³²⁾

「築山は、水を用いると見事になるが、土地が高く、水が流せないなら、(わざと)水の流れない谷を作ればよい。水の流れない谷も実に深い趣があるものである。」

假山以水爲妙。倘高阜處不能注水。理潤壑無水。似有深意。

これにより、水を流せないところにも、庭園空間をつくらうとしていたことが理解されよう。すなわち、水を用いない庭園空間が、中国にもあったようである。また、水を用いない谷の美しさが見出だされていることは、極めて注目し直しよう。これは、夢窓疎石がというような枯山水の特質に極めて通ずる造形思想であるとみなせるのではなからうか。とすれば、中国にも、かつて、枯山水に類似する庭園があったかもしれないと解釈することもできるのではなからうか。ところが、枯山水を考える時、この点が言及され検討された例を筆者は知らない。³³⁾

IV) 日本の假山趣味の内容

さて、ここで、假山あるいは假山水を主題にした禅僧の詩を通して見た日本における假山趣味の内容をまとめれば、次のようになる。尚、假山水という言葉は、どうやら、いわゆる庭園空間を意味するようだが、假山という言葉が、単に築山を意味するものか、いわゆる庭園空間を意味するものかは、必ずしも明確ではない。

i) “欄の前”や、“庭の下”や、“窓の前”にある假山を觀賞するとあるので、假山が、建物の中より、觀賞するものであったと考えられる。たとえば、景徐周麟、義堂周信、別源円旨、虎関師練の假山に関する詩や虎関師練の假山水に関する詩が、その例である。

ii) 建物あるいは塀に囲まれた小さな空間(庭除)に、假山が作られている。別源円旨の假山に関する詩が、その例である。

iii) 土で假山を作っている。これは、石を用いて複雑に構成されている現在の中国の假山と大きく異なる点であろう。景徐周麟、別源円旨、虎関師練の假山に関する詩や虎関師練の假山水に関する詩が、その例である。ところで、禅院において、土で假山を作ること、十六世紀のはじめ頃まで、行なわれていないようであるとする研究者があるようである。³⁴⁾しかしながら、以上の詩を見る限り、そのように言い切れるかどうか、疑問である。

iv) 珍しい石(奇石)や見事な石(靈石)などを假山に用いている。夢巖祖応、別源円旨、虎関師練、天岸慧広の假山に関する詩が、その例である。

v) 神仙の伝えにいう蓬萊、瀛州、方壺といった神山や、仏教の教えにいう檀特山を象る(あるいは、象ると解釈される)假山がある。虎関師練、天岸慧広の假山に関する詩や虎関師練の假山水に関する詩が、その例である。

vi) 何かを象徴した小規模な假山を作ろうとしている。別源円旨、虎関師練の假山に関する詩や般若房宗照、虎関師練、夢窓疎石の假山水に関する詩が、その例である。ところで、これは、“縮地の術”という言葉をもって表現され得る造形思想である。これを、極めて禅的なものとする解釈もある。しかし、本来、これは、中国起源の神仙に関わる伝説に基づく造形思想である。尚、同様な造形思想が、かつては、韓国でも、中国でも流行していたようである。

vii) “残山剩水”といった中国山水画の構図法が取り入れられている。天岸慧広の假山に関する詩が、その例である。ところで、枯山水の構成は、中国の山水画に基づくとする説明が多い。しかしながら、中国に於いても、山水画の技法ならびに理論を作庭に応用することが、明らかに行なわれている。では、なぜ、同じ山水画を手本にしたはずの中国の庭園と日本の枯山水は、

かくも形態を異にするのであろうか。さらに、検討を要しよう。

Ⅷ) 水を用いず、水の流れを想像させる石組、あるいは、庭園がある。夢窓疎石の假山水に関する詩が、その例である。ところで、これは、まさしく、枯山水の特質に関わるものといえよう。しかしながら、このような庭園趣味が、夢窓疎石によって創造されたといいきれるかどうかは、まだ疑問である。

ところで、現在のところ、夢窓疎石(1276-1351)の「假山水韻」と題する詩が、以上のような假山趣味を示す最も古い例のひとつといえそうである(第Ⅲ節参照)。一方、大仙院の假山は、1513年頃に作られたようである(第Ⅰ節参照)。

したがって、大仙院の枯山水のような庭園様式が成立するまでに、その背景として、以上のような假山趣味が十三世紀後半から十六世紀前半にかけて流行していたといっていよう。

2. 韓国における假山趣味

本章では、假山を主題に記された文献資料を通して、韓国における假山趣味を概観する。

ところで、朝鮮宣祖二十三年(1590)に、通信使が、日本へ派遣されている。その時、副使を務めた金誠一(1538-1593)が、大仙院の庭園に関して記録を残している。彼の記録は、韓国の知識人が、日本の枯山水を如何に解釈したかを示す貴重な資料であるといってもよいだろう。そこで、先ず、第Ⅰ節で、金誠一の記した記録の内容を紹介検討したい。

次に、大仙院の庭園がつくられた頃を僅かに先行する時期(十五世紀後半頃)の韓国において、「假山烟嵐」と題する詩をつくるのが広く流行している。その内容は、当時の韓国における假山趣味をよく示すものと考えられる。そこで、第Ⅱ節では、「假山烟嵐」と題する詩の代表例を紹介し、その内容を検討したい。

次に、韓国における假山趣味を最もよく示すものとして、石假山というものがある。そこで、第Ⅲ節では、石假山を記した文献資料を紹介し、その内容を検討する。

次に、韓国庭苑学会は、日本の枯山水の源流は、韓国にあるとする。そして、その実例の一つとして、清平寺文殊院の庭園の石組をあげている。しかしながら、韓国庭苑学会の解釈は必ずしも正しいとはいいきれないのではなかろうかと、筆者は考えている。そこで、第Ⅳ節では、その理由を若干ではあるが整理して置きたい。

そして、最後の第Ⅴ節で、韓国における假山趣味の内容を整理する。

Ⅰ) 朝鮮通信使副使が記した大仙院の假山

朝鮮の宣祖二十三年(1590)、すなわち、日本の天正

十八年、黄允吉(1536-?)を通信使、金誠一(1538-1593)を副使、許箴(1548-1612)を書状官とした朝鮮通信使の一行が、京都を訪れている。この時、大仙院を訪ね、その庭園の見事さに感激したことを、副使の金誠一が、その文集『海槎録』に記している。その内容は、大方次の通りである。³⁵⁾

「八月二日、書状官の許箴と共に、大徳寺の大仙院、正受院、興臨院、金毛閣に遊んでの所見を記す。…何も云わずに、庭の木の枝を横目で眺めると、実に深い趣に誘われた。そして、北へ回り、(大)仙院に入った。何処までも歩いた。国師と号する禅僧がおられた。ためらう私達を歓迎してくれた。庭前に、目が暗むような巖洞があった。俗世から遠く離れたその地は、あたかも仙境のようであった。松や檜が、その峯の上をおおっていた。老木の幹に玉蚪がどくろをまいていた。私達のまわりは、すがすがしい雰囲気となった。まるで、青く美しいもやが、帳の中へ入り込んでくるかのようであった。沙弥(出家し十戒を受けた男子)が、果物や酒をすすめてくれた。主人の国師と私達客人は、互いに、見合うだけで、杯を挙げて、取り交すことはなかった。私達は、それから、杯を置いて、門を出た。…」

八月二日與書狀遊大徳寺大仙院正受院興臨院金毛閣記所見。…嘿嘿眇庭柯。妙意心自求。北轉入仙院。散策窮探搜。有禪號國師。掃榻請夷猶。庭前幻巖洞。絶境如丹丘。松檜翳其嶺。老幹蟠玉蚪。餘涼生兀席。碧靄覆禪幃。沙彌進嘉果。侑以酒一甌。主客但相視。舉杯誰與酬。舍之出門去。…

以上により、大仙院の庭園の石組の見事さに感激したことが理解されよう。また、それを仙境(丹丘)としてとらえている点も注目されよう。

そして、後日、さらに次のように記している。

「大仙院の假山は、たいへん見事なので、また、遊びに行きたいのだが、未だ望みがかなっていない。それで、夜明けに起きて、心に懐うところを筆に任せて書き付け、山前(書状官である許箴)と五山(車天略のこことか?)の二人に示し、賦を共につくることを求めた。

蓮の花が、空の上に、幻のように現われる。深い谷の奥が、格子窓の向こうに見える。まばらな竹や茂った栢の木の色が入り交じる。美しい草々が、風になびく。壺中の天地(すなわち、仙境)が、そこにある。俗世の煩わしさは、この山水の景の中に、入ってこない。仏法に帰依する者たちは、ここで座禅し、門を出ない。…」

大仙院假山甚佳。欲再遊。而病未之果。曉起信筆述懷。呈山前五山。索同賦云。

芙蓉幻出諸天上。洞壑竊窺富房櫺。疎竹茂栢翠交加。瑤草獵獵披香風。壺中天地別一區。俗塵不到烟霞中。道人宴座不出門。…

以上により、大仙院の庭園が、韓国の知識人によって

も、假山と称されていたことが確認される。これは、日本における假山という言葉の内容と、韓国における假山という言葉の内容が等しかったことを示すものであるとみなせよう。

ところで、金誠一は、大仙院の庭園を假山と称し、そして、それを“壺中の天地（壺中天地）”という表現を用いて、仙境としてとらえている点は、極めて興味深い。彼は、以上の文を、賦を共につくろうと、朝鮮から同行してきた山前と五山の二人に示している。ということは、“壺中の天地”という假山の解釈は、当時の韓国の知識人の間で、広く理解されていたと考えてよからう。実は、假山を“壺中の天地”，すなわち、壺の中の仙境としてとらえることは、次節で示すが、すでに、十五世紀には、韓国の知識人の間で、広く流行していた假山の解釈方法だったようである。また、この“壺中の天地”という考え方は、日本の假山趣味において見られた、“縮地の術”と淵源をまったく同じくする中国起源の神仙に関わる伝説に基づく造形思想である（第一章第Ⅱ節の別源円旨の詩を参照）。したがって、大仙院の假山が、“壺中の天地”としてとらえられているということは、あるいは、韓国の假山趣味と日本の假山趣味に、何らかの共通点があったからだと解釈することができるのではなからうか。大仙院の假山が、極めて見事だったことは、金誠一の記すところにより明らかであるが、表現できない、或いは、理解できない趣があったわけではない。大仙院の假山は、韓国の知識人が求めていた“壺中の天地”としての假山の傑作のひとつであったともいえるのではなからうか。とすれば、あるいは、韓国にも、大仙院の假山と同様な假山があったかもしれないと解釈することもできるのではなからうか。

Ⅱ）假山烟嵐

『匪懈堂四十八詠』、あるいは、『応製次四十八詠韻』等と称され、七言八句、七言四句、五言八句、あるいは、五言四句といった形式をとる四十八篇よりなる詩がある。その中の一篇である「假山烟嵐」と題する詩は、多少の言葉遊びの要素もあろうが、朝鮮時代（1392-1910）初期の假山趣味を知るためのよい資料といえよう。³⁶⁾以下に、その代表例を見てみたい。尚、この詩が広くつくられた時代は、十五世紀後半頃である。したがって、大仙院の假山がつくられた頃（1513年頃）をほんの僅かに先行する時期にあたり、注目に値しよう。

先ず、七言八句の形式をとるものの原韻とされる魯陵子（15C.）の「假山烟嵐」は、大方次の通りである。³⁷⁾

「珍しい形をした巖石が、力強く聳え、そこに、滝が、落ちている。あの名山、廬山が、窓の前まで、迫っているかのようである。峰の上では、美しい天女が舞う。谷

に立ち籠めている雲や霧が、ここまで覆ってくる。洞穴の中には、壺中の天地（仙境）がある。そこへは、この洞穴を通して行き来する。山中に、人を訪ねる。いったい、誰に道を尋ねようか。」

拳矗奇巖竅瀑泉。恍然陞岳壓窓前。幾峯神女行雲雨。萬壑烟嵐映几筵。空洞壺中天地別。晦冥塵外往來躔。山中要憶青蓮士。高訪何人問道旋。

以上において注目すべき点は、

- ①珍しい形をした石を用いた假山であること。
- ②窓の前に、迫っているとあるので、建物の中より觀賞する假山であると考えられること。
- ③窓の前に、中国の名山を象ると解釈される假山がつくられているので、作庭における“縮地の術”が用いられているとみなせること。
- ④假山の洞穴が、“壺中の天地”としてとらえられていることである。

ところで、原韻として用いられたこの詩に、“壺中の天地”という言葉が用いられている点は、韓国の知識人の間において、假山を“壺中の天地”としてとらえることが、広く理解されていたことを示していると考えてよからう。また、この原韻と同韻を踏む七言八句形式の「假山烟嵐」である次の二例においても、“壺中の天地”という解釈の方法が確認される。

俞好仁（1445-1494）の「假山烟嵐」は、大方、次の通りである。³⁸⁾

「気ままに、庭園をつくった。中国の名山、天壇山や廬山の風景が、目の前にできあがった。假山よりたちのぼる一筋の気を、すぐそこに感じる。日陰が、宴席にかかってくる。假山に、紅の雲がかかる様を想像する。壺中の世界（壺中の天地）を思わせるこの庭園は、実に、穏やかである。古より仙境への入り口と伝えられている中国の名山、仇池の風景が、窓の側に広がっている。いろいろと思いをはせるものである。」

天游隨處做林泉。王屋匡廬在眼前。一片清嵐迷咫尺。半邊陰翳滴盤筵。山中遙想紅雲染。壺裡長閑白日躔。萬古仇池隔窓几。三魂清夢幾回旋。

以上において注目すべき点は、

- ①“壺中の天地”という考え方が、確認されること。
- ②目の前に、中国の名勝を象る庭園があるとあり、作庭における“縮地の術”が確認されることである。

崔恒（1409-1474）の「假山烟嵐」は、大方、次の通りである。³⁹⁾

「庭園への思いを起こした。突然、神仙の伝えにいう羅浮山が、目の前に現われた。峰は、霞が深い。静かに扉を開いてみた。すると、風が、漂う山の気を運んで来た。木々のみどりも美しかった。なぜか、滝は落ちてい

なかった。滝は、やはり、落ちていたほうがいい。高い峰は、空の美しい星に向かって聳えていた。縮地の術によって、まさに、壺中の世界（壺中の天地）が出来上がっていた。近いうちに、藍色の輿に乗って、そこを、気ままに訪ねてみたい。」

起余遐想八林泉。一點羅浮忽眼前。烟滋疊岫青排闥。
風送浮嵐翠滴筵。絕竇也應流玉乳。危峯直欲掇珠躔。
縮地真成壺裏界。藍輿早晚恣盤旋。

以上において注目すべき点は、

- ①「壺中の天地」という考え方が確認されること。
- ②作庭における「縮地の術」が確認されること。
- ③神仙の伝えにいう羅浮山を象る築山があることである。

尚、「縮地の術」によって、「壺中の天地」をつくるとある。これは、「縮地の術」という造形思想と「壺中の天地」という造形思想が、実は、同じ内容のものであることを示していると解釈できよう。

金駟孫（1464-1498）の「假山烟嵐」は、以上と同韻を踏み、その内容は、大方、次の通りである。⁴⁰⁾

「私の假山の半ばあたりには、ささやかな滝が落ちている。欄の前に、ささやかな谷や峰が連なっている。月明かりに照らされた石が美しい。白雲を背景にした木々の翠が美しい。假山は、伝説にいう大海亀が、蓬萊、瀛州、方壺の三つの神山を頭に載せているかのようだ。空には、星が、玉を連ねるように美しく、そして、五つに分かれて宿っている。まさに、桃源郷（仙境）がここにある。花が散り舞い上がり実に美しい光景である。」

愚山半落小平泉。尺壑拳峯列檻前。石氣蒼流明月地。
林光翠滴白雲筵。鰲頭載髻蟠三島。星頂聯珠墮五躔。
欲問桃源無覓處。飛花溪上舞回旃。

以上において注目すべき点は、

- ①欄の前に、假山があること。したがって、建物の中より觀賞する假山であると考えられること。
- ②神山を象る築山があることである。

申叔舟（1417-1475）の「假山烟嵐」は、七言四句の形式をとり、その内容は、大方、次の通りである。⁴¹⁾

「階段の前に、土で、ささやかな築山をつくった。いろいろと工夫をこらした。朝早くから、すぐ近くに、雲がわき霧がたちこめる。遙かに広がる靄のなかで、座って、深い思いを寄せる。」

聚土階前作小山。峯巒林壑費機關。朝來咫尺烟嵐起。
坐寄幽懷渺靄間。

以上において注目すべき点は、土で、築山をつくっている点である。

Ⅲ）石假山

韓国では、石でできた假山を、特に、石假山と称し、建物の傍らや苑池中に配置することが伝統となっている。⁴²⁾ 惜しむらくは、その伝統が、どの時代まで遡り得るのかは、必ずしも、明らかにはなっていないようである。

ところで、大仙院の假山がつくられた頃を僅かに遡る時期（十五世紀後半頃）に記された文献資料の中に、石假山に関する記録が散見する。そこで、本節では、その代表例を見ることにする。⁴³⁾

崔台甫の石假山

金宗直（1431-1492）の『佔畢齋集』には、崔台甫（？）の石假山に関して、次のような詩が見られる。⁴⁴⁾

「崔台甫の家に、石假山がある。三つの峰があり、穴が開いていて、向こうが透けて見え、実に見事である。その一つをもらって、我が家の書斎の傍らに置きたいと思う。何かと交換してもらおうと思うが、我が家には、交換するに値するものが何もない。そこで、ともかく、蘇東坡の「壺中九華」という詩の韻を用いて、詩をつくり、崔台甫に差し上げようと思う。」

という序があり、そして、次のように記されている。

「君の家で、かつて、青くて美しい石でできた三つの峰よりなる石假山を見た。それを見ると、雑念がたちまちに消え去った。遙か遠くにあり、仙境への入り口と伝えられる中国の名山、仇池の風景が、すぐ、足下にあるかのようだった。高く鋭い峰が連なっていた。松や杉がかすみ、岸が切り立っていた。靄が起り、洞穴を霞ませていた。さて、中国唐代玄宗皇帝（685-762）の頃の有名な画家である韓幹（？）が描いた馬の絵を、今、持っていないのが悔やまれる。もし、持っていれば、軒端にあるその美しい石假山と交換してもらえらるだろうに。実に、つらいことである。」

崔台甫家。有石假山。三峰峯巒。洞穴玲瓏。可愛也。欲易其一。置之書室傍。僕之家。無一物可相直者。姑用東坡壺中九華韻。呈台甫。

君家曾眇碧三峯。塵土襟懷忽已空。萬里仇池來脚底。
千尋圓嶠列庭中。松杉隱隱岩崖響。烟霧霏霏洞穴通。
却恨吾無韓幹馬。軒窓那得對玲瓏。

以上において、注目すべき点は、

- ①伝説にいう中国の名山、仇池の風景が、すぐ、足下にあるかのようだとあるので、日本の假山趣味においても確認される「縮地の術」が、ここにおいても、確認されること。

- ②中国宋代の文豪である蘇東坡（1036-1101）の「壺中九華」という詩の韻が用いられていることである。⁴⁵⁾

実は、この「壺中九華」という詩は、中国における「壺中の天地」という考え方に基づく假山趣味を示す最も代表的な詩である。その詩の影響が、ここに確認され

るわけである。ということは、韓国における“壺中の天地”という考え方に基づく假山趣味は、韓国の知識人が、中国起源の神仙の伝説に基づき独自に生み出したものではなく、中国の假山趣味を、直接、あるいは、文学等を通して間接的に取り入れたものであると解釈してよいだろう。

成任の石假山

成任(1421-1484)は、字を重卿といい、昌寧の出身の文臣で、山水を楽しむ癖があり、晩年、庭園に石假山をつくったことで、当時かなり有名であったらしい。以下に、彼の石假山に関して記した文献資料の代表例を、断片的にはあるが、紹介検討する。

姜希猛(1422-1483)の「假山讚」には、次のような記載が見られる。⁴⁶⁾

「…我が友である昌寧の成重卿氏は、建物の後の空き地に、石を積んで假山をつくっている。それは、高さが一丈ほどで、その後には、甕が据えてある。その甕に、きれいな水を貯え、甕の腹の部分に穴を開けて、水が流れ出るようにしている。そして、そこから、假山の中腹に、細い流れをつくり、それが、滝として落ちるように工夫している。…その様は、まるで、蓬萊、瀛州、方壺といった三つの神山や、中国にある五つの名山のようである。…大風景を小さく縮めるといった神仙の術(縮地の術)を用いている。…大地を延ばしたり、縮めたりして、山水の景をつくっている。…」

…吾友昌寧成重卿氏。於堂後隙地。疊石爲山。高僅一丈。置甕其後。貯以清泉。穴甕腹。通山腰細流淙淙然落爲乱瀑。…面面異狀。如三山五岳。…縮大爲小。神仙是式。…舒縮地脉。幻成山水。…

以上において注目すべき点は、

- ①日本の假山趣味においても確認される“縮地の術”という造形思想が、ここにおいても確認されること。
- ②三山五岳とあるので、神山を象ると解釈される假山であること。
- ③建物の後の空き地とあるので、小さな空間に庭園がつくられていると解釈されることである。

徐居正(1420-1488)の「假山記」には、成任の石假山が、大方、次のように記されている。⁴⁷⁾

「…建物や塀に囲まれた小さな空間(庭除)に、假山をつくっている。その様は、実に、見事である。私こと、徐居正は、かつて、彼の家に行き、それを見たことがある。假山の高さは、一丈強ほどである。…また、水を流し、滝を落とし、速い流れをつくり、深い池を穿っている。池の広さは、数尺を越えない。水は清く、砂は白くて美しい。…中国の名山である衡山、廬山、泰山、華

山といった山々や、洞庭湖、彭蠡湖といった湖の名勝が、ことごとく、そこにつくられている。天地万物を創造した神が、秘術である“縮地の術”を用いて、それらをそこに集めたかと思わせる。…中国の蘇明允は、「假山記」を記していつている。「假山を好きになり、尊敬し、そして、假山に感動せよ」と。私は、成任侯にも同じようにいわれたものである。…」

…作假山于庭除。亦瑰奇可賞矣。居正嘗造而目之。山之高可丈餘。…又注水爲飛瀑。爲犇川。爲泓池。池之脩廣亦不過數尺。水清沙白…而衡廬泰華。洞庭彭蠡之勝。一一呈態。吾疑造物者縮地脉。破神慳。恍惚移於斯也。…昔蘇明允作假山記曰。愛之敬之感之。吾於侯亦然。…

以上において注目すべき点は、

- ①作庭における“縮地の術”が用いられていることが、ここにおいても確認されること。
- ②建物や塀に囲まれた空間(庭除)に假山がつくられていること。
- ③蘇明允の「假山記」のことが言及されていることである。⁴⁸⁾

ところで、蘇明允、すなわち蘇洵(1009-1066)は、中国宋代の文豪で、蘇東坡の父にあたる。彼は、「假山記」(正確には、「木假山記」)を記している。これは、当時の中国の假山趣味を示す代表的な詩である。ここに、このような詩が言及されていることは、韓国の假山趣味と中国の假山趣味との間に、何らかの深い関係があったことを意味すると解釈してよいだろう。

李承召(1422-1484)の「石假山詩序」には、成任が、なぜ石假山をつくったのか、ほぼ次のように記されている。⁴⁹⁾

「…池を穿ち、泉を引き、石を積んで假山をつくった。…なぜ、假山をつくったのかと尋ねたら、成任侯は、次のように、答えた。「すでに、歳をとった。筋力がなくなった。立ち上がる時には、さらに、人の助けを必要とする。旅をすることができなくなったのは、いうまでもない。しかし、山水を愛好する癖は、すでに、治る見込みがないほど、どうしようもない。ある時、部屋の中に、座ったり、寝たりしたまま、山水を眺めたくなった。そこで、假山をつくった。流れをめぐらし、草木を植えた。峰は、聳えさせ、美しく向こうが透けて見えるようにした。」と。…假山は、小さいけれど、高大な中国の名山、泰山の趣を持っている。また、池は、小さいけれど、広大な滄海の趣を持っている。…」

…鑿池引泉疊石爲假山。…何用假山爲哉。侯曰。年已衰矣。筋力耗矣。起立尚須人扶。況堪登陟之勞哉。然而山水之癖。已入膏肓。未可遽醫。欲於軒窓。几席之間。坐臥相對。乃作假山。環以清泉。植以嘉卉。峯巒巧秀。玲瓏可賞。…不知太山之爲大。而假山之爲小。一坳之爲

小。而滄海之爲大也。…

以上において注目すべき点は、

①小さな假山に、高大な泰山の趣を持たせているので、作庭における“縮地の術”が用いられているとみなせること。

②部屋の中より眺める観賞用の假山であることである。

金守温（1409-1481）の「石假山記」によれば、成任の石假山は、三つの峰によりなっていたようである。⁵⁰⁾

「…昔、蘇老泉は、水辺に沈み、水に削られた浮木を用いて、木假山を作り、そして、その記を記している。…（これに、対して、）成任公は、居間の傍らに、珍しくて古めかしい石を集めて、高く積んで、山のようにした。峰や谷は、奥深い趣があり、その様は、まるで、中国の名山、嵩山や華山のようである。そして、それを名付けて、「石假山」とよんだ。…蘇老泉は、木假山の三つの峰を、自らと、二人の息子である蘇東坡と蘇轍にたとえた。一方、成任公には、三人の子がある。…三人の子を山にたとえた。…」

…昔老泉取沙沉水齧之查。以爲木假山。作文以記。…吏判成公。於燕寢之旁。聚石之奇古者。積而高之。其壯若山。峯巒洞壑之幽。依然如望嵩華。名曰石假山。…蘇老泉比父子於三峯。而今公亦有三子。…以三子比山。…

以上において注目すべき点は、

①居間の傍らに、中国の名山を象するような假山がつくられているので、作庭における“縮地の術”が用いられていると解釈されること。

②ここにおいても、蘇老泉、すなわち、蘇洵の「木假山記」が言及され、中国の假山趣味の影響を確認できること。（上述した徐居正の「假山記」を参照。）

③ 成任は、彼の三人の子を山にたとえたとあるので、成任の石假山が、三つの峰によりなっていたと解釈されることである。⁵¹⁾

IV) 文殊院の庭園

大韓民国の江原道春城郡鏡雲山に位置する清平寺文殊院の庭園は、日本の枯山水の源流が韓国にあったことを示す注目すべき事例として、韓国庭苑学会によって紹介されている。⁵²⁾ したがって、枯山水を考える時、見落してはならない庭園である。しかしながら、韓国庭苑学会の解釈には、問題がないとはいいいきれない。そこで、その理由を以下に整理しておきたい。

まず、韓国庭苑学会の報告は、まとめれば、ほぼ次のようになろう。

「文殊院の庭園は、高麗（935-1392）建国初期、王家と深い姻戚関係にあった名門出身の学者、李資玄（1061-1125）によりつくられた禪院の庭園である。彼は、29歳の時（1089）、大樂署丕という地位に就くも、忽然と官

職を捨て、清平山へ隠遁したという。そして、彼の父、李顥（？）が建てた普賢院を拡張し、文殊院を起こしたと伝えられる。『（朝鮮金石総覧）真樂公重修清平山文殊院記』には、「寺の外に、洞があった。聖域がつくられていた。その庵、堂、亭、軒といった建物は、全部で、10以上あった。（院外別洞。構間燕之所。其庵堂亭軒。凡十有餘處）」とある。庭園は、これらの建物と同じ時期、すなわち彼が入山した1089年から、彼が亡くなった1125年までの間のある時期に、つくられたものと考えられる。

そこには、怪石を用いた築山があり、それは、日本の西芳寺の石組を思わせるものである。また、文殊院の庭園の作者である李資玄は、西芳寺の庭園の作者である夢窓疎石（1276-1351）より、250年ほど、昔の人物である。したがって、西芳寺の庭園の作庭には、文殊院の庭園を見た人物が関わっているとも考えられる。

ところで、中国における庭石の歴史は、九世紀以降である。一方、韓国における庭石の歴史は、北朝鮮の安鶴宮の遺構より考えて、遅くとも五世紀には、始まっている。ちなみに、安鶴宮の遺構は、枯山水の源流として、森蘊によってすでに、紹介されているものである。したがって、枯山水の源流は韓国にあると考えられる。」

さて、以上の韓国庭苑学会の解釈に対して、若干の疑問点をあげれば、つぎのようになる。

怪石を用いた築山が、李資玄の作であると韓国庭苑学会は報告しているが、そのことを明確に示す文献資料は、現在のところ、まったく、見出だせないようである。⁵³⁾ また、韓国庭苑学会の報告によれば、怪石を用いた築山は、その付近にある方池と同じく李資玄の作であるという。しかしながら、この方池に関しても、李資玄の作であることを示す文献資料は、見出だせないようである。実際、この方池の発掘調査によれば、方池は、高麗時代（935-1392）の末から、朝鮮時代（1392-1910）の前期にかけてのものであろうという。⁵⁴⁾ さらには、この方池発掘の指導委員で、文化財管理局長の鄭在鏣は、この方池は、十六世紀のものであろうとする。⁵⁵⁾ したがって、方池も築山も、そのつくられた年代は、現在のところ、まったく明らかではないとしかいいようがない。つまり、現在の文殊院庭園は、李資玄の作であるとはいいいきれないのである。⁵⁶⁾

また、現地を確認するに、築山とみなされている怪石群に、きわめて類似する自然石群が、周辺に多く見出だされる。⁵⁷⁾ 韓国庭苑学会の報告を見る限りでは、何によって、人工の築山と判断したものか理解しがたい。

さらには、中国の庭石の歴史は、9世紀以降であると韓国庭苑学会は考えているが、実は前漢時代（206-8 B. C.）まで、遡り得るようである。たとえば、前漢の梁孝王（？）や袁広漢（？）の庭園に関する記録がそれを

示すよい例であるといえよう。⁵⁸⁾したがって、現在のところ、庭石の古さで論議するかぎりにおいて、枯山水の源流は韓国にあるとは、断定しがたいのである。

以上により、韓国庭苑学会の文殊院の庭園に関する解釈には、そのままでは首肯しがたい。しかしながら、もし、文殊院の庭園の築山が、実際に、人工の築山であると、明らかに証明されるならば、その築山は、その年代が16世紀に下るものであっても、少なくとも、韓国に、日本の假山趣味に関連するのではなかろうかと考えられる假山趣味があったことを示す遺構として、極めて重要な意義をもつといえよう。したがって、文殊院の庭園に関して再検討を行なうことを強く期待するものである。

V) 韓国の假山趣味の内容

さて、ここで、假山あるいは石假山を主題に記された文献を通して見た韓国における假山趣味の内容をまとめれば、次のようになる。

- i) 建物の中より鑑賞する假山であったと考えられる。
たとえば、魯陵子、金駟孫の「假山烟嵐」、李承召の「石假山詩序」が、その例である。
- ii) 建物あるいは塀に囲まれた小さな空間（庭除）に、假山がつくられている。徐居正の「假山記」が、その例である。
- iii) 土でつくった假山がある。申叔舟の「假山烟嵐」が、その例である。
- iv) 珍しい石や見事な石が、假山に用いられている。魯陵子の「假山烟嵐」が、その例である。
- v) 神山等を象る假山がある。崔恒、金駟孫の「假山烟嵐」、姜希猛の「假山讃」が、その例である。
- vi) “縮地の術”が用いられている。魯陵子、俞好仁、崔恒の「假山烟嵐」、金宗直の石假山に関する詩、姜希猛の「假山讃」、徐居正の「假山記」、李承召の「石假山詩序」、金守温の「石假山記」が、その例である。

おわりに

以上のように、山水画の理論の応用、ならびに、水を用いない假山の記録は見いだせないものの、日本の禅僧の假山趣味と極めて類似する假山趣味が、韓国にもあったようである。特に、日本の枯山水の特質を論ずるとき、よく言及される“縮地の術”という言葉に代表されるような造形思想が、ほぼ同時代（十五世紀）の韓国においても、假山の基本的な造形思想になっていたようである。この点は、極めて注目すべき点であろう。

また、確かに、韓国の假山趣味においては、水を用いない庭園を明確に示す文献資料は、現在のところ、見だせないようである。しかしながら、韓国のすべての庭園空間に、水が引かれていたと、はたして、いいきることができようか。韓国における今後の古庭園の調査を期

待したい。あるいは、近い将来、明らかに枯山水とみなし得る実例が見出だされるかもしれない。実際、すでに、北朝鮮の安鶴宮や定陵寺の考古発掘調査を通して、枯山水ともみなし得る庭園遺構が確認されている。⁵⁹⁾これらの遺構は、枯山水の源流を検討するうえで、極めて重要な意義をもつといえよう。これらの遺構を如何に解釈するかが、今後の課題となるだろう。

註：

- 1) 庭園の構成要素としての枯山水、すなわち、『作庭記』にいうような枯山水に関しては、次を参照。
拙稿：『『作庭記』にいう枯山水の源流』、『造園雑誌』56(1)1992 pp.1-14
- 2) この点に関しては、次の文献がよくまとまっている。
吉川需：『枯山水の庭』（日本の美術61）、東京；至文堂 1981 pp.20-29
- 3) 日本の枯山水と韓国の庭園に関する掘り下げた比較研究と見做せるものは、例えば、僅かに、次のような文献があげられる程度である。
-a) 鄭腫昨：「韓日伝統庭園様式の比較研究」、『韓国庭苑学会誌』第1巻第1号 ソウル；韓国庭苑学会 1982 pp.41-62
-b) 金鎬然（他）：「高麗初期に築造された文殊院庭苑に関する調査研究」、『韓国庭苑学会誌』第1巻第1号 ソウル；韓国庭苑学会 1982 pp.74-95
- 4) 日本の庭園と中国の庭園との関係に関しては、次が注目に値する。
田中淡：「中国造園史における初期的風格と江南庭園遺構」、『東方学報第62冊』、京都；京都大学人文科学研究所 1990 pp.125-164
- 5) 假山水という言葉は、庭園を意味する假山と同義語である。（第一章第Ⅲ節参照）
- 6) -a) 森蘊：『庭園』（日本史小百科19）、東京；近藤出版社 1984 pp.210-211

以上の文献は、日本庭園史に関する通説をまとめたものとして、特に、よくまとまっている。

このほか、大仙院の庭園を掘り下げて扱ったものとして、次のような文献をあげることが出来よう。

- b) 重森三玲：『室町の庭（二）』（日本庭園史大系第6巻）、東京、社会思想社 1974 pp.53-69
- c) 久恒秀治：『京都名園記上巻』、東京；誠文堂新光社 1967 pp.285-

なお、現在の大仙院の庭園は、古岳宗亘がつくったものではないとする次のような文献もある。すなわち、古岳宗亘がつくった庭園は、すでにとり払われ、現在の庭園は、天正二年（1574）の改修によるものであろうとする。しかしながら、必ずしもそう言い切れるかどうか、筆者は疑問をもっている。し

たがって、本稿では通説に従っておく。(註34) 参照)

- d) 大山平四郎：『日本庭園史新論』，東京：平凡社 1987 pp.414-421

また、枯山水に関しては、特に、次の文献が、よくまとまっている。

- e) 2) に同じ。
-f) 森蘊：「枯山水」，『日本文化史』(四，室町時代)，東京：筑摩書房 1966 pp.222-227
-g) 重森完途：『枯山水の庭』(日本の庭園，第三巻)，東京：講談社 1980

また、西洋の研究者による枯山水に関するの代表的論文として、次をあげておくことができよう。

- h) Hennig, Karl: Der Karesansui-Garten als Ausdruck der Kultur der Muromachi-Zeit, Hamburg; Gesellschaft für Natur-und Völkerkunde 1982
7) 『(故大徳正法法師) 古岳大和尚道行記』(重森三玲：『日本庭園史大系』第六巻所収)
8) 『烏鴉集』(重森三玲：『日本庭園史大系』第六巻所収)
9) 次の文献は、原資料を写真で示しており、極めて、貴重である。

- a) 中根金作：『庭』(名庭の鑑賞と作庭)，大阪：保育社 1973 pp.222-223

尚、以上の文献の内容には、次の文献の内容が、引用を示されずに数多く引かれている。このような点は、先学の業績を著しく傷つけることにもなり得るので、我々は慎むよう努力しなければならないと、筆者は考えている。

- b) 外山英策：室町時代庭園史，東京：岩波 1934
10) 『翰林葫蘆集』，巻三。
11) 『空華集』巻九。
12) 『早霖集』律詩七言。
13) 『東帰集』諸體混。
14) 『後漢書』巻百十二下。『神仙伝』巻五。
15) たとえば、中根金作 9)-a) p.20, 福田和彦16)-c) p.36
16) たとえば、中根金作は、9)-a) p.20で、縮地の術が極めて禪的なものとする解釈を示している。また、次の文献は、以上の中根金作の解釈を、ほぼそのまま無批判に引いているようである。
-a) 佐々木銀弥：『室町幕府』(日本の歴史第十三巻)，東京：小学館 1975 p.348-350

次の文献も、同じく、縮地の術を、禪の思想の産物の如くとらえている。

- b) 伊藤ていじ：『日本の庭』，東京：中央公論社 1971 pp.174

また、福田和彦は、次の文献で、縮地(の術)は、山水画の理論に基づき、はじめて、成立した造形思想と説く。

- c) 福田和彦『日本の名庭』(現代教養文庫493)，東京：社会思想社 1964 p.36

また、大山平四郎は、6)-d) pp.825-826で、仏教思想に基づく山水画理論から、縮地(の術)といった造形思想が、生まれたと解釈する。

しかしながら、縮地の術という造形思想は、本来、中国に古くからあった神仙の伝説に基づくもので、これが、後に、山水画の理論や庭園の造形に応用されたと考えるほうが正しいようである。註14) 参照。

- 17) すでに、この点に関しては、次の文献によって、明快に説かれている。

王毅：園林与中国文化，上海：上海人民出版社 1990

- 18) 『濟北集』巻三。
19) 『濟北集』巻三。
20) 『東帰集』偈頌。
21) 例えば、森蘊 6)-f) p.223, 重森完途 6)-g) p.163, 福田和彦16)-c) pp.36-38, 中根金作 9)-a) pp.18-19
22) この点に関しては、田中淡 4) pp.149-156が、よい参考となろう。
23) 『園冶』自序：「…予曰。此製不第直掇石而高。且宜搜土而下。令喬木參差山腰蟠根嵌石。宛若画意。…先生称讚不已。以為荆関之絵也。…」
24) 9)-b) pp.676-679参照
25) たとえば、中根金作は、9)-a) p.20で、般若房宗熙は、枯山水をつくったと解釈している。
26) 『松山集』偈頌。
27) 『濟北集』巻二。
28) ところで、外山英策は、9)-b) p.465で、山という字を表すような築山を、三つの神山と解釈するが、筆者は、以上のように訳出するにとどめた。
29) 『尺素往来』(『群書類従』消息所収)
30) 『夢窓正覚心宗普濟國師語録』下。
31) たとえば、次の文献は、枯山水は、禪宗文化の所産であり、夢窓疎石によって創造されたと言っている。
福田和彦：『日本の庭』，東京：河出書房新社 1962 p.229
32) 『園冶』巻三。澗。
33) 言及という点に限れば、すでに、次の文献に、この点が指摘されている。
岡大路：支那庭園論，東京：彰國社 1943 p.250
34) 例えば、大山平四郎は、6)-d) p.416で、禪院の土を用いた築山は、乱世になってからと断定している。が、はたしてそういいきれぬだろうか。また、この

点を、古岳宗巨のつくった大仙院の庭園は、まったく払われてしまって、現在の庭園は、後世(1574年)の改修によるものとする彼の説の根拠の一つにしている。筆者には、現在のところ、彼の説が通説を覆せる程の説得力を有しているとは思えない。

- 35) 『金鶴峯海槎録』巻一(『海行摠載』一所収)
- 36) 尚、本稿にて紹介できなかった例として、他に、例えば、朴祥(1474-1530)の『訥齋集』、蔡壽(1449-1515)の『懶齋集』、洪貴達(1438-1504)の『虛白亭集』、金守温(1409-1481)の『拭疣集』、成三問(1418-1456)の『成謹甫集』などに見られる「假山烟嵐」がある。
- 37) 金駟孫の『濯纓集』続集上に所収。
- 38) 『潘谿集』巻六、四十八詠。
- 39) 『太虛亭集』詩集巻一、匪懈堂四十八詠。
- 40) 『濯纓集』続集上、四十八詠廣韻底製。
- 41) 『保閑齋集』巻六、題匪懈堂四十八詠。
- 42) 尚、「石假山」という言葉は、韓国で独自に用いられた用語ではないようである。例えば、中国、明代の瞿佑(1341-1427)の『剪燈新話』所収『渭塘奇遇記』には、「下設石假山三峰」という句が見られる。
- 43) 尚、本稿にて紹介できなかった例として、他に、例えば蔡壽(1499-1515)の『懶齋集』巻二「石假山瀑布記」、成倪(1439-1504)の『虛白堂集』文集巻一「石假山賦」、李承召(1422-1484)の『三灘集』巻九「石假山」などがあげられる。
- 44) 『佔畢齋集』巻十六。
- 45) 『蘇東坡詩集』巻三十八。
- 46) 『私淑齋集』巻五。
- 47) 『四佳集』文集巻一。
- 48) 『嘉祐集』巻十四。

- 49) 『三灘集』巻十一。
- 50) 『拭疣集』巻二。
- 51) 本稿にて、検討できなかったが、三つの峰より成る假山が、日本、韓国、ならびに、中国の文献資料の中に、数多く記されている。この点は、日本の三尊石組とあわせて、検討の余地があろう。
- 52) 3)-b) 参照。
- 53) 尚、3)-b) pp.75-76, p.85でも、紹介されているが、清平寺文殊院、ならびに、李資玄に関する資料としては、次のような文献があげられる。『(朝鮮金石総攬) 真楽公重修清平山文殊院記』、『楡岾寺本末寺誌(清平山)』、『東國輿地勝覽』巻四十六。文殊院。『(東文選) 清平山文殊院記』、『高麗史』列伝巻九十五。李資玄。『破閑集』中巻。李資玄。
- 54) 現地説明板参照。尚、詳しい報告書は、まだ出版されていないようだが、概要は次の文献で知られる。
-a) 李相弼:「春城清平寺址整備及び影池発掘調査報告」、『文化財18』, ソウル; 文化財管理局 1985 pp.58-79
-b) 趙由典:「清平寺影池及び能仁殿址発掘調査」, 『文化財20』, ソウル; 文化財管理局 1987 pp.112-136
- 55) 鄭在臈: 韓国の古造景(한국의옛조경), ソウル; 大圓社 1990 p.110
- 56) 鄭臈昨は、次の文献のpp.121-123で、この方池を高麗時代の遺構として扱ってはいるが、必ずしも、そういういされるわけではないことを、すでに指摘している。鄭臈昨:『東洋造景史』, 光州; 全南大学校出版部 1990
- 57) 筆者は、1991年八月、現地を訪れたことがある。
- 58) 1) 参照。
- 59) 1) 参照。

(1992.5.29受付 1993.10.13受理)

Summary : Karesansui 枯山水 is the term used today to describe Japanese gardens with stone arrangements. A typical example would be the Daisen-in 大仙院 stone garden, which was made in the 16th century. This paper attempts to prove that at the time when those gardens were made, another term was used to describe this type of arrangement : kasan 假山. The term kasan actually refers to an artificial mountain or artificial mountains mainly in gardens, sometimes in small basins. The term (jiashan in Chinese, k. in Korean and Japanese) originated in China, along with the habit of creating such stone arrangements.

This paper introduces the representative records from the 12-16th centuries in Korea and Japan using this term. For example, even the garden of the Daisenin, which is the most famous garden in the Karesansui style, was recorded as Kasan in the classical texts written by a Japanese Zen monk and even a Korean scholar, who visited it in the 16th century.

My main point is to show that the intellectuals in Japan and Korea followed the same type of garden making theory during the period when the Karesansui style was established in Japan. This gives us a new possibility of interpreting the Karesansui garden in a larger Asian context.